様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２５０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３５１２

研究課題名（和文）東ユーラシアにおける貨幣考古学の確立を目指した考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological research aiming at establishment of the Numismatic Archaeology in Eastern Eurasia

研究代表者
三宅　俊彦（Miykae, Toshihiko）

淑徳大学・人文学部・教授

研究者番号：９０４２４３２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,500,000円

研究成果の概要（和文）：本科研費の目的は、東ユーラシアにおいて、中世以降の銭貨流通の状況を把握し、「東ユーラシアにおける貨幣考古学」という分野を確立することである。その目的は、ほぼ達成されたと考える。
日本国内では西日本・東北・北海道を中心に、調査研究を進めた。その結果、西日本および九州の中世から近世の出土銭の様相を明らかにし、青森県と北海道では出土銭のデータベース化を行うことができた。また国外では、中国、モンゴル、ベトナムにおいて出土銭調査を行った。その結果、中世から近世にかけての各地の銭貨流通の実態を解明した。その成果を基に、東ユーラシアの銭貨流通のモデル化を完成させ、研究基盤の構築を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的成果として、青森県と北海道の出土銭データベース作成をあげることができる。また国外ではベトナム、モンゴル、中国において出土銭調査を行い、その実態を解明した。また英国において博物館収蔵の貨幣コレクションの調査も行った。さらに、これらの調査成果を基に、東ユーラシアにおける銭貨の流通モデルを構築し、貨幣考古学分野の研究基盤を提示できたことは、大きな成果である。
　成果の一部は、国際学会などにおいて広く海外の研究者にも発信しているほか、学術論文および成果報告集として刊行し、公表している。さらにベトナムなど海外でも、調査成果の報告が現地メディアで取り上げられるなど、社会還元に努めている。

研究成果の概要（英文）：　The goal of this research is to understand the post-medieval coin flow situation in East Eurasia and to establish the field of numismatic archaeology for East Eurasia. This goal has more or less been attained.
　In Japan, surveys and research have been promoted mainly in West Japan, the Northeast and Hokkaido. As a result, aspects of excavated coins from the medieval to the early modern periods in West Japan and Kyushu have been clarified and it has been possible to create a data base for excavated coins in Aomori Prefecture and Hokkaido.
　Outside Japan, surveys and research on excavated coins have been carried out in China, Mongolia and Vietnam. Thanks to these, light has been shed on the coin flow situation in those areas from the medieval to the early modern periods. On the basis of these results, modeling has been completed of coin flow in East Eurasia and a research base has been constructed.

研究分野：考古学

キーワード：東ユーラシア　出土銭　貨幣流通　中世・近世　貨幣考古学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

### （１）当該研究分野の現状

東ユーラシアでは、多くの国が興亡を繰り広げたが、それらの国々に共通して発行・流通した貨幣が、「銭貨」と総称される中央に方孔のある円銭であった。そのため、当該地域の貨幣を考古学的に研究し体系化するには、出土銭貨を調査・研究することが重要である。

出土銭貨の考古学的研究は、日本では鈴木公雄（『出土銭貨の研究』東京大学出版会 1999 年ほか）や櫻木晋一の『貨幣考古学序説』（慶應義塾大学出版会 2009 年）などにより、着実に進展しつつある。また雑誌『出土銭貨』（出土銭貨研究会）により、研究者間の情報共有が図られてきた。

しかし、中国をはじめとする東アジアや東南アジアでは、銭貨が大量に流通していたにもかかわらず、関心がうすく情報もほとんどない状態であった。この状況を受け、研究代表者は中国の一括出土銭の情報を集成し、日本の資料との初歩的な比較検討を行った（三宅俊彦『中国の埋められた銭貨』（同成社 2005 年））。しかし日本以外の中国周辺地域の様相は、いぜんとして不明のままであった。

### （２）東ユーラシアでの研究の開始

そのため 2006 年以降、東ユーラシアの出土銭の様相を探るため各地で調査を開始した。

まず東南アジアでは、2006 年からベトナムのハノイにて調査を開始し、2009 年まで 7 次にわたり調査を行った。その結果、ベトナム北部では中国や自国の銭貨が流通していただけでなく、長崎貿易銭・寛永通寶など日本の銭貨も流通していたことが明かとなった。

さらにインドネシアでは、科研費により出土銭の調査を実施し（2011～2013 年、計 3 回）、ジャワ島およびバリ島にて多くの出土銭資料を確認した。特にジャワ島東部では良好な一括出土銭 2 点も調査することができた。その結果、中世の中国銭がマジャパヒト王朝成立前後にジャワ島東部で流通が開始されたことが確認できた。また近世のバリ島では寺院の祭祀に銭貨が重要な役割を果たしており、中国銭だけでなくベトナムや日本の銭貨も多数もたらされていた実態が明らかとなった。

またラオスにおいても科研費による調査を実施した（2013,2014 年）。その結果、ラオスのシェンクワン地域において銅銭が流通していたことが明らかとなった。それらの銭貨は中国銭だけでなく、ベトナム鋳造の銭貨や日本の長崎貿易銭など、様々な種類が確認された。

研究代表者は、北東アジアにおいても行っている。科研費の研究分担者として、北海道およびロシアのサハリン・沿海州において、銭貨流入の背景や銭種の特徴、少数民族による銭貨の経済外的使用の実態などを明らかにしている。またモンゴルのカラコルム遺跡の出土銭調査も実施し、カラコルムでは中国銭が主体であり、中でも大型銭の割合が高いという特徴を明らかにした。

こうした一連の調査により、着実に調査成果は蓄積され、成果は報告書、学術論文として公表し、また複数の新聞でもその成果が報道されている。

### （３）研究の発展と統合の必要性

これら研究の成果を総括した結果、東ユーラシア全体を視野に入れた体系的な研究の確立が必要な段階へ進んできていることが明らかとなった。これを受け、全体を俯瞰して研究を統合するような、「東ユーラシアにおける貨幣考古学」の確立を目指すことを目的として、本科研を申請するに至った。

## ２．研究の目的

### （１）研究の範囲・時代

本研究では日本を含む東アジアと東南アジアを「東ユーラシア」と呼ぶことにする。この地域は本研究対象である銭貨の流通地域と重なる。そのため、本研究では東ユーラシアを、方孔円銭の出土銭貨が普遍的に発見される地域と定義し、研究対象とする。

時代は日本の中世から近世に相当する時期を対象とする。この時期は日本でも渡来銭から寛永通寶まで、銭貨が貨幣流通の一翼を担っていた。これは東ユーラシアでも同様であり、各国で中国銭を受容するだけでなく、自国の銭貨も鋳造していた。

### （２）研究の方向性

この時期における各地の銭貨流通の実態を解明し、共通点と差異を抽出して体系化することを目指す。本研究を行うことにより、東ユーラシアにおける銭貨流通の実態がより具体的に解明され、貨幣考古学の研究の方向性が明確化されることが期待できる。

広い地域での調査研究は、国や地域をこえてダイナミックに動く銭貨の流れと受容、貨幣利用と経済外的利用における地域間の共通点と差異が明確に抽出できるであろう。例えば中世の日本やベトナム、インドネシアでは中国銭は「銅の一文銭」のみが受容されているが、モンゴルや沿海州では大型銭が高い比率で受容されている。これらは中国本土との経済的繋がりの粗密、自国経済の自立性の高さを反映していると予想される。

上記のような視点から、東ユーラシアの出土銭を分析する研究は、これまで行われて来なかったものである。本研究により「東ユーラシアにおける貨幣考古学」という新分野の確立が可能であると考える。

３．研究の方法
（１）現地調査とその方法
調査は、当該地域の日本、中国、モンゴル、ベトナムなどで、出土銭資料のデータ化を行う。これまでの科研費などにより、すでに調査に着手している地域もあり、それらを継続してさらに発展させてゆく。
調査方法は、情報の収集とデータベース化を進め、調査可能な資料においては、銭貨の種別の判読、数量の集計、写真撮影・拓本など、考古資料として利用できるように資料化することを進める。なお、北海道などの出土銭に関しては、函館工業高等専門学校にて成分分析（蛍光 X 線分析）も試みる。
これらの調査により、各地の銭貨流通の実態を把握し、銭貨受容の地域的特徴と共通性を抽出して体系化を試みる。各地で流通した銭貨の特徴を考古資料から広範囲に比較することで、はじめて東ユーラシアにおける銭貨の様相が解明できると期待される。

（２）研究成果の共有と社会還元
さらに研究成果の共有を図るため、国内外の研究者を招き、研究会を開催する。また国外では現地での研究成果の公表を視野に、国際シンポジウムなどの開催を予定している。また国際学会においても積極的に情報公開に努めたい。

４．研究成果
（１）国内の調査研究の成果
国内では、北海道と青森において、出土銭貨のデータベース化を進めた。これにより、中世から近世にかけての時期的な出土銭の変遷を考古学的に検討できることとなった。また北海道においては、一括出土銭のひとつである知内町上雷発見の資料に対し調査を行った。銭種組成を明らかにし、近隣の一括出土銭との比較を行った結果、資料の埋蔵年代を推定することが可能となった。また涌元、賀張、コタン浜、上雷の各資料の、永楽通寶に対して成分分析を行った。その結果、制銭と私鋳銭の弁別が可能という見通しを得た。これらは、北海道の銭貨流通の状況の解明に資する貴重な成果である。
また九州では長崎、熊本で出土銭の調査を行った。長崎では出島出土の銭貨を調査し、近世の日本の銭貨のみならず、オランダ銭などのヨーロッパ通貨の研究も進んだ。また熊本では寛永通寶の一括出土銭を調査した。幕末から明治初期の当時の熊本での銭貨流通状況を解明する、貴重な成果と評価できる。
これら国内の調査成果は、研究分担者である中村和之、櫻木晋一によって、2019 年 1 月に大阪大学で開催された国際学会 Asian Association of World Historians 2019 にて開催したパネル“An Attempt to Establish East Asian Numismatic Archeology : Expansion and Acceptance of Chinese Coinage in East Asia as Seen in Archaeological Sources“ において発表され、本研究の成果を内外に公表することができた。

（２）国外の調査研究の成果
まず、本研究課題の調査計画の一つであった、中国の深セン博物館に収蔵されている一括出土銭資料の調査が、行うことができなかった。これは、中国国内の法制度の改正が原因であり、新たに共同研究を進めるための体制を再構築する必要が生じた。そのため、当初の計画を変更し、珠海市博物館、香港歴史博物館、香港古物古蹟弁事処での資料調査および、珠海市博物館と香港中文大学での研究会などの開催に変更し、珠江河口域の出土銭の実態把握に努めた。また以下に記すとおり、ベトナムで予定していた調査の規模の拡大、英国の博物館収蔵の東ユーラシア貨幣コレクションの調査など、計画の見直しと新しい研究テーマの開拓を行った。その結果、ベトナムで予想外に多くの日本銭が流通していたことを確認し、国外の博物館資料に関する新しい研究テーマの発見があるなど、当初の予定とは異なるものの、研究に資する重要な成果を上げることができた。
ベトナムでは、ハノイ国家大学の研究者と共同で、調査研究を行った。ハノイ歴史博物館に所蔵されている銭貨鋳型の調査および、ハティン省博物館収蔵の一括出土銭調査を行った。特にハティン省博物館では、近世の一括出土銭を 4 点調査することができた。特筆すべきは、日本で鋳造された長崎貿易銭が大量に含まれていたことである。このことから、当時の日本とベトナムにおける、貨幣を通じた交易の実際の状況や、日本鋳造の銭貨が国外で流通していた実態を解明するなど、大きな成果をあげることができた。また、これらの成果に関しては、ハティン省文化体育観光局にて、国際セミナーを開催して成果を公開し、現地メディアでも報道されるなど、現地での調査成果の社会還元でも成果をあげた。
モンゴルでは、モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所に収蔵されている出土銭貨の調査を行った。特にカラコルム遺跡から出土した銭貨に関しては、すべての銭貨を計測し画像データ化を進めた。また可能な限り拓本を採取した。これにより、モンゴル帝国期のモンゴル高原での銭貨流通の様相が具体的に明らかとなった。また、資料化したデータは現在、図録として現地で刊行すべく、その内容を協議中である。
このほか国外においては、英国ケンブリッジ大学フィッツウィリアム博物館収蔵銭貨、デンマ

ークのデンマーク国立博物館のブラムセンコレクションの調査を行っている。特に英国ケンブリッジ大学の貨幣コレクションの調査は現在も継続している。この資料の入手経路などの調査は、博物館資料論の観点から、近世の海外コレクターの動向などを解明できる資料と評価でき、当該研究の新しいテーマとして、研究の発展が期待できる。

（3）全体の総括と今後の展望

4 年間にわたる本研究を通じて、東ユーラシアの中世以降の銭貨流通の状況を把握し、「東ユーラシアにおける貨幣考古学」という分野を確立するという、当初の目的は、ほぼ達成されたと考える。

日本国内では西日本・東北・北海道を中心に、調査研究を進めた。その結果、西日本および九州の中世から近世の出土銭の様相を明らかにし、青森県と北海道では出土銭のデータベース化を行うことができた。また国外では、中国、モンゴル、ベトナムにおいて出土銭調査を行った。その結果、中世から近世にかけての各地の銭貨流通の実態を解明した。

その成果を基に、東ユーラシアの銭貨流通のモデル化を完成させ、研究基盤の構築を行った。このモデル化は、今後の研究基盤の構築のために、有用であろう。その概要を以下に述べる。

出土銭の用途は、第一に貨幣として用いられ、また価値保存を目的とした備蓄の手段としても機能した。さらに地中から出土する銭貨は、経済外的な用途のものもあり、例えば墓の副葬品のほか、災いを祓う厭勝銭、衣服や首飾りの装飾などに銭貨を用いることも、普遍的に見られる。

そして銭貨が発見される遺跡・遺構の種類としては、一括出土銭があり、また都市・土城など、多くの人が生活していた遺跡では、かなり普遍的に個別に銭貨が出土する。上記の出土銭の性格と、発見される遺跡・遺構の種類によって要素を整理し（表 1)、「出土量の多寡」と、「決済手段としての認識」をもとに流通モデルの地域を設定していく。地域は中心‐周辺‐辺縁の同心円を構成し、要素を減少させながら広がっていく。流通モデルでは、中心から地域 A (a)、地域 B (b)、地域 C（c）と呼ぶ（図 1)。

表 1　銭貨流通モデルの考古資料の要素と地域区分

| 用途 | 経済的用途（決済手段） | | | 経済外的用途（決済手段ではない） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 出土状況（要素） | 一括出土銭 | 都市・土城 | 住居 | 副葬品 | 厭勝銭 | 装飾品 |
| 地域 A（a） | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 地域 B（b） | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 地域 C（c） | × | × | △ | ○ | ○ | ○ |

○普遍的に見られる　△発見されることがあるが多くない　×ない

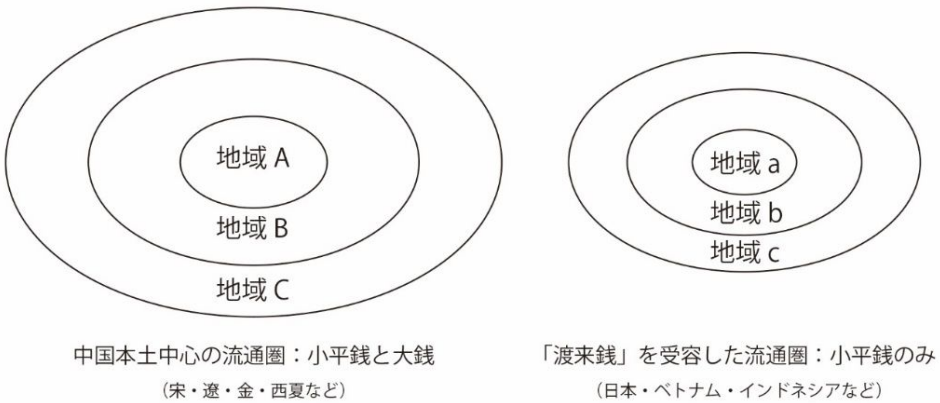


図 1　東ユーラシアにおける銭貨流通モデルの概念図

地域 A ‐ 地域 B ‐ 地域 C は、中国本土を中心（地域 A）とし、「一文銭と大銭の両方」が流通する。周辺にはその影響を強く受けるモンゴルや沿海州など（地域 B）があり、中国本土との決済手段として銭貨を用いる。さらに辺縁に「貨幣」としての認識を減じながら、装飾品などに銭貨を用いるアムール川中下流域やサハリンなど（地域 C）が存在する。

一方、地域 a‐地域 b‐地域 c は日本本土、ベトナム、インドネシアなどの銭貨流通圏に設定される。これらの地域はそれぞれ個別に銭貨を受容しているものの、「銅の小平銭のみ」を受け入れるという点で、共通するメカニズムが働いている。これらの地域にも同心円状に流通圏が形成されている。

そして両者が近接する周辺や辺縁地域では、同心円構造が重複している場合がある。そのため

地域A － 地域B － 地域Cと、地域a－地域b－地域cが重複している地域では、両者の影響を受けた出土銭貨の様相を示す。この流通モデルの有用性は、まさにこうした二つの流通圏が重なり合った場所で出土する銭貨について、その出自を整理し、東ユーラシアの銭貨の動きの中に位置づけることができる、という点にある。

北東アジアと北海道の考古事例を、銭貨流通モデルに当てはめるなら図2のようになる。モンゴルや沿海州は銭貨が大量に出土するものの一括出土銭はないため地域 B 相当する。アムール川流域からサハリンは副葬品や装飾としての銭貨が見られるのみで地域 C に属するが、サハリンは同時に地域cとも重複している。また北海道は基本的には本州の銭貨流通圏に属し、道南は地域a、道央は地域b、道東と道北は地域cに対応するが、同時にサハリンからの銭貨流入により地域Cとも重複する。

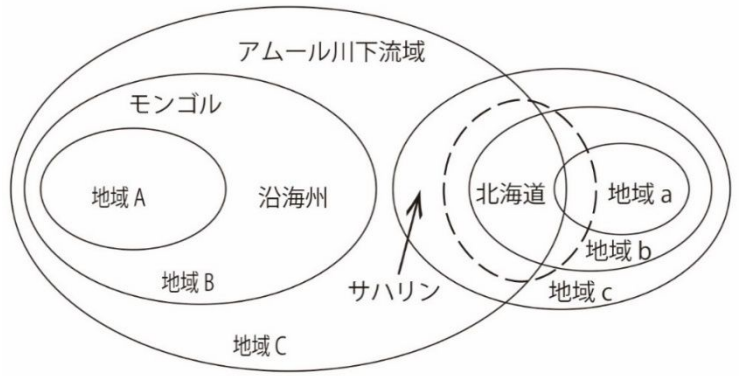


**図2　北東アジアの銭貨流通モデル**

また沖縄の出土銭の特徴から、東ユーラシアにおける銭貨流通モデルに当てはめると次のようになる。まず一括出土銭がない、つまり地域aを設定できないことは、沖縄には独自の流通圏は存在しないことになる。さらに沖縄では、出土銭は沖縄本島に集中し、中でも那覇市域（首里・那覇）が突出して多い。国際交易を担っていた那覇と外交使節との交渉が行われる王都において、多くの銭貨が用いられていたことを示す。こうした状況は、銭貨流通モデルの地域 B（b）の特徴と一致する。離島などの地域には出土銭が少なく、決済手段としての銭貨の使用は沖縄本島が中心であり、離島などでは浸透していなかったと考えられる。また出土銭の中には孔が穿たれたものがあり、装飾品として利用されたものが存在する。経済外的利用が相対的に高まっており、銭貨流通モデルの地域C（c）に相当する。

以上の点から、沖縄の出土銭貨の状況を銭貨流通モデルに位置づけると、次のようになる。沖縄本島は中国の流通圏「地域B」であると同時に、日本本土の流通圏「地域b」でもあった。そして離島などでは銭貨の決済手段としての機能が弱まっていることから「地域C」であり「地域c」でもあった（図3）。

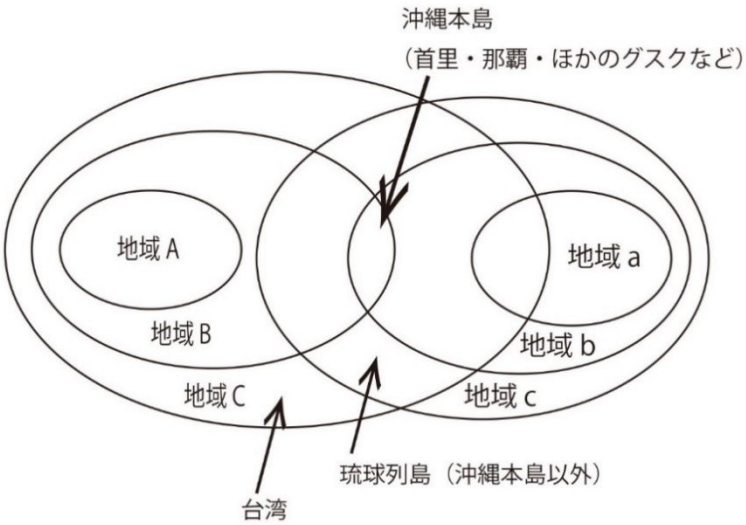


**図3　沖縄の銭貨流通モデル**

この中世の東ユーラシアにおける銭貨流通モデルの提示を試みた。これは貨幣考古学の理論構築の一つの試案と位置づけることができる。今後このモデルの有用性をさらに検証し、より精度の高いものへと作り上げていくことが求められよう。東ユーラシアの貨幣考古学の研究理論の基盤構築へ向けて、上記モデルの検証とともに、本研究で得られたいくつかの課題について、さらに研究を発展させていくことが求められよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計22件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>三宅俊彦 | ４．巻<br>第77巻第2号 |
| ２．論文標題<br>10-15世紀東ユーラシアにおける銭貨流通 | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>東洋史研究 | ６．最初と最後の頁<br>1-40 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中村 和之、三宅 俊彦、村串 まどか、小林 淳哉、セルゲイ V．ゴルブノーフ | ４．巻<br>第28号 |
| ２．論文標題<br>ハリン島で発見された常平通寶の成分分析 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>北海道立北方民族博物館研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>111-115 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>NAKAMURA Kazuyuki, MIYAKE Toshihiko, KOBAYASHI Junya, TAKAHASHI Naoki | ４．巻<br>第53号 |
| ２．論文標題<br>Chemical Analysis of the Vietnamese Coin“Khai Thai Nguyen Bao” Discovered in Shiriuchi Town, Hokkaido Prefecture, Japan | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>函館工業高等専門学校紀要 | ６．最初と最後の頁<br>58-62 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>櫻木晋一・鶴島博和 | ４．巻<br>Ⅲ |
| ２．論文標題<br>砥川古銭の調査報告 | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>科学研究費基盤(A)課題番号16H01953「前近代ユーラシア西部における貨幣の流通のシステムの構造と展開」報告書 | ６．最初と最後の頁<br>4-79 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>櫻木晋一 | 4．巻<br>第2分冊(分析・考察編) |
| 2．論文標題<br>出島和蘭商館跡　江戸町側出土銭について | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>出島和蘭商館跡出島表門橋架橋に伴う発掘調査報告書 | 6．最初と最後の頁<br>87-96 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>中村和之，三宅俊彦，GORSHKOV Maxim Valerievich，小林淳哉，村串まどか | 4．巻<br>52 |
| 2．論文標題<br>Chemical Analysis of the Chinese Coin Yongle Tongbao owned by Khabarovsk Regional Museum named after N.I. Grodekov | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>函館工業高等専門学校紀要 | 6．最初と最後の頁<br>39-47 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>"https://doi.org/10.20706/hakodatekosen.52.0_39 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>小林淳哉，中村和之 | 4．巻<br>－ |
| 2．論文標題<br>チャシコツ岬上遺跡から出土した神功開寶の成分分析 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>平河内毅編著『チャシコツ岬上遺跡 総括報告書』斜里町教育委員会 | 6．最初と最後の頁<br>113-115 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>小田寛貴，中村和之 | 4．巻<br>74 |
| 2．論文標題<br>北海道函館市鉄山遺跡において発見された鉄滓の14C 年代測定と鉄山町 付近の製鉄に関する文献史料からの検討 | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>考古学と自然科学 | 6．最初と最後の頁<br>15-27 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>櫻木晋一 | 4．巻<br>第2分冊 |
| 2．論文標題<br>出島和蘭商館跡出土の貨幣について | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>出島長崎市教育委員会『国指定史跡出島和蘭商館跡銅蔵地他中央部発掘調査報告書』 | 6．最初と最後の頁<br>86-95 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>遠藤ゆり子 | 4．巻<br>27 |
| 2．論文標題<br>「伊達天正日記」所収「野臥日記」の一考察―政宗による民衆の軍事動員を考えるために― | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>市史せんだい | 6．最初と最後の頁<br>23-49 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>櫻木晋一、三宅俊彦 | 4．巻<br>1 |
| 2．論文標題<br>九州で鋳造された銭貨について | 5．発行年<br>2016年 |
| 3．雑誌名<br>淑徳大学人文学部歴史学科調査研究報告第1集コタン浜出土銭 | 6．最初と最後の頁<br>51～55 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>小林淳哉，中村和之 | 4．巻<br>36 |
| 2．論文標題<br>緑青の発生した古銭の表面組成から内部組成の推定 | 5．発行年<br>2016年 |
| 3．雑誌名<br>出土銭貨 | 6．最初と最後の頁<br>38～42 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Мияк э Т., Н а к а м у р а К. | 4．巻<br>23 |
| 2．論文標題<br>Н а х о с к и К и т а й с к и х и Я п о н с к и к м о н е т н а С а х а л и н е | 5．発行年<br>2016年 |
| 3．雑誌名<br>В е с т н и к С а х а л и н с к о г о М у з е я | 6．最初と最後の頁<br>54～89 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>櫻木晋一 | 4．巻<br>1 |
| 2．論文標題<br>所見 | 5．発行年<br>2016年 |
| 3．雑誌名<br>淑徳大学人文学部歴史学科調査研究報告第1集コタン浜出土銭 | 6．最初と最後の頁<br>48～50 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>中村和之 | 4．巻<br>1 |
| 2．論文標題<br>コタン浜出土銭とルルモッペの歴史的位置づけ | 5．発行年<br>2016年 |
| 3．雑誌名<br>淑徳大学人文学部歴史学科調査研究報告第1集コタン浜出土銭 | 6．最初と最後の頁<br>5～14 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>遠藤ゆり子 | 4．巻<br>- |
| 2．論文標題<br>伊達領国下の置賜地方-戦国時代の長井荘と村落- | 5．発行年<br>2016年 |
| 3．雑誌名<br>米沢市上杉博物館、米沢市上杉博物館編 開館一五周年記念特別展　伊達氏と上杉氏―舘山城跡国史跡指定記念― | 6．最初と最後の頁<br>113～120 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>三宅俊彦 | 4．巻<br>- |
| 2．論文標題<br>東アジアの出土銭貨 | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>平成28年度平和中島財団アジア地域重点学術研究助成成果報告書　台湾の鉄器時代文化と琉球列島の比較考古学 | 6．最初と最後の頁<br>53-60 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Казуюки Накамура, Тосихико Миякэ, С.В. Горбунов, Мадока Муракуси, Дзюнья Кобаяси, | 4．巻<br>28-3 |
| 2．論文標題<br>ХИМИЧЕСКИЙ АНАЛИЗ МОНЕТ " САНПХЁН ТХОНПО" , ОБНАРУЖЕННЫХ НА ОСТРОВЕ САХАЛИН | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>Вестник Сахалинского музея | 6．最初と最後の頁<br>115-121 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>三宅俊彦 | 4．巻<br>5 |
| 2．論文標題<br>沖縄の出土銭 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>淑徳大学人文学部研究論集 | 6．最初と最後の頁<br>81-96 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>三宅俊彦 | 4．巻<br>738 |
| 2．論文標題<br>海外で出土した寛永通宝 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>考古学ジャーナル | 6．最初と最後の頁<br>9-13 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>櫻木晋一 | 4．巻<br>988 |
| 2．論文標題<br>「貨幣考古学」から見た中近世移行期 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>歴史学研究 | 6．最初と最後の頁<br>29-38 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>櫻木晋一 | 4．巻<br>738 |
| 2．論文標題<br>総論　歴史資料としての近世銭貨 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>考古学ジャーナル | 6．最初と最後の頁<br>3-4 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　5件／うち国際学会　9件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>MIYAKE Toshihiko |
| 2．発表標題<br>Circulation of Chinese coins in East Asia |
| 3．学会等名<br>Asian Association of World Historians 2019（国際学会） |
| 4．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>三宅俊彦 |
| 2．発表標題<br>10-15世紀欧亜大陸東部的銭幣流通 |
| 3．学会等名<br>香港中文大学歴史系（招待講演） |
| 4．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>NAKAMURA Kazuyuki |
| ２．発表標題<br>The Circulation of Chinese Coins in the North of Japanese Archipelago and the Ainu |
| ３．学会等名<br>Asian Association of World Historians 2019（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中村 和之 |
| ２．発表標題<br>北海道の教育におけるアイヌ史・アイヌ文化の位置づけ |
| ３．学会等名<br>一般社団法人日本考古学協会第84回総会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>松本義之・櫻木晋一 |
| ２．発表標題<br>ディープラーニングによる渡来銭貨の識別 |
| ３．学会等名<br>第31回バイオメディカル・ファジィ・システム学会年次大会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>SAKURAKI Shinichi |
| ２．発表標題<br>The current state of studies of numismatic archaeology in Japan |
| ３．学会等名<br>Asian Association of World Historians 2019（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>KIKUCHI Yuriko |
| ２．発表標題<br>The acceptance and circulation of Chinese coinage in Vietnam |
| ３．学会等名<br>Asian Association of World Historians 2019（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>菊池百里子・三宅俊彦・櫻木晋一・Hoang Van Khoan ・ Dang Hong Son |
| ２．発表標題<br>ベトナム・ハティン発見の一括出土銭―寛永通宝、長崎貿易銭からの考察― |
| ３．学会等名<br>日本考古学協会第85回研究発表会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>三宅俊彦 |
| ２．発表標題<br>東ユーラシアの出土貨幣 |
| ３．学会等名<br>「東ユーラシアにおける中世貨幣」基盤研究（A）（16H01953）（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>三宅俊彦 |
| ２．発表標題<br>大銭の諸問題 |
| ３．学会等名<br>「日本中世貨幣史の再構築―学際的な中世貨幣学の確立に向けて」第3回研究会、基盤研究（B）（17H02389） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中村和之 |
| ２．発表標題<br>アムール河下流域における明朝と先住民との朝貢交易 |
| ３．学会等名<br>第32回北方民族文化シンポジウム 環北太平洋地域の伝統と文化2 サハリン（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>三宅俊彦 |
| ２．発表標題<br>東ユーラシアにおける出土銭の研究 |
| ３．学会等名<br>東洋史研究会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2016年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>三宅俊彦 |
| ２．発表標題<br>東アジアの出土銭 |
| ３．学会等名<br>八重山の先史文化とその周辺―台湾鉄器時代文化と琉球列島の比較考古学― |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>三宅俊彦 |
| ２．発表標題<br>東亜出土銭幣的考古研究 |
| ３．学会等名<br>環珠江口考古演講会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>松本義之、櫻木晋一 |
| ２．発表標題<br>ディープラーニングによる画像認識を用いた出土銭貨の分類に関する研究 |
| ３．学会等名<br>第29回バイオメディカル・ファジィ・システム学会年次大会 |
| ４．発表年<br>2016年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>菊池百里子 |
| ２．発表標題<br>歴史資料からみた日本とゲティンの関係 |
| ３．学会等名<br>ハティン省の考古学資料から見た日越交流（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>三宅俊彦 |
| ２．発表標題<br>東アジアにおける一括出土銭の調査 |
| ３．学会等名<br>ハティン省の考古学資料から見た日越交流（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>櫻木晋一 |
| ２．発表標題<br>ハティン省発見の日本銭 |
| ３．学会等名<br>ハティン省の考古学資料から見た日越交流（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計4件

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>三宅俊彦、中村和之、櫻木晋一、福士廣志 | 4．発行年<br>2016年 |
| 2．出版社<br>淑徳大学 | 5．総ページ数<br>117 |
| 3．書名<br>淑徳大学人文学部歴史学科調査研究報告第1集コタン浜出土銭 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>櫻木晋一 | 4．発行年<br>2016年 |
| 2．出版社<br>ニューサイエンス社 | 5．総ページ数<br>175 |
| 3．書名<br>貨幣考古学の世界 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>菊池百里子 | 4．発行年<br>2017年 |
| 2．出版社<br>雄山閣 | 5．総ページ数<br>243 |
| 3．書名<br>ベトナム北部における貿易港の考古学的研究―ヴァンドンとフォーヒエンを中心に― | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>三宅俊彦、中村和之、遠藤ゆり子、菊池百里子、櫻木晋一、他 | 4．発行年<br>2020年 |
| 2．出版社<br>淑徳大学 | 5．総ページ数<br>111 |
| 3．書名<br>東ユーラシアにおける貨幣考古学の確立を目指した考古学的研究 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 櫻木　晋一<br>(Sakuraki Shinichi)<br>(00259681) | 朝日大学・経営学部・教授<br>(33703) | |
| 研究分担者 | 菊池　百里子（阿部百里子）<br>(Kikuchi Yuriko)<br>(50445615) | 沖縄県立芸術大学・付置研究所・研究員<br>(28001) | |
| 研究分担者 | 遠藤　ゆり子<br>(Endo Yuriko)<br>(70612787) | 淑徳大学・人文学部・准教授<br>(32501) | |
| 研究分担者 | 中村　和之<br>(Nakamura Kazuyuki)<br>(80342434) | 函館工業高等専門学校・一般人文系・教授<br>(50101) | |
| 研究協力者 | 西川　和孝<br>(Nishikawa Kazutaka)<br>(50755957) | 東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員<br>(12603) | |